

編集後記

この第22号もこれまでと同様に名古屋大学附属図書館のレポジトリに登録されるとともに、技術教育学研究室（横山研究室）のHPに掲載される。研究室のHPには、室報全体をPDF化したものを掲載している。HPのアドレスは以下の通りである。

http://gi.jyutukyoiukugaku.blogspot.com/p/blog-page_58.html

本号では、ノルウェーのビヨーン・オークレ（Bjorn Aakre）氏に論考を寄せていただいた。氏と初めて会ったのは、私がスウェーデンのリンショーピン大学に滞在していた1997年10月頃にノルウェーのテレマーク大学教育学部で開催されたNordfo会議（北欧5ヶ国のスロイド教育関係者が集まって、年1回スロイド教育の理論と実践を議論している）の時であったように記憶している。氏は最初の職業はノルウェー空軍の技術者であったと聞いたことがある。彼がなぜ教育学に関心を持ち、教育学を学び、テレマーク大学教育学部でそれを教えるようになったのか、詳細には聞いたことはない。彼の日本に対する関心の高さは相当なものがあつた。日本語こそできなかったが、この20年間に毎年のように日本を訪問していた。2008年に半年間客員教授として名古屋大学教育学部に招聘したことがあつた。その際に遊びの教育学から職業の教育学まで広く議論をする機会をもつことができた。ノルウェーでは、大都市部は別として、人々は普通の生活でナイフを携帯して、いろいろなことに利用している。ノルウェーの幼稚園を訪問したときには園児たちにナイフを使わせていた。森に行き、ナイフを使って自然に働きかけることによって自然を学ぶことも重要な教育であつた。このような取り組みを彼が名古屋大学の学生を相手に実践していただいた。

先述したNordfo会議で知り合った、ギスリ・ソルシュテインソン氏（アイスランド教育大学）を頼って、1998年2月にアイスランドのレイキャビックを訪問した。当時のアイスランドの人口は約25万人といわれていた。そんな人口の少ない国が独自の言語を維持していることに驚かされたが、彼の車で「folkskola（民衆学校）」（日本の小・中学校に相当）をいくつか訪問した。アイスランドもノルウェーもスウェーデンも人口の割に国土が広く、学校教育（民衆学校）が隅々まで行き渡ることは大変なことであつた。スウェーデンでは、民衆学校令が制定されてから（1842年）、全国各地に普及するまでに60年以上の年月を必要とした。このような北欧の国々で、民衆学校の教育にスロイド教育が現在まで関わり続けたのはなぜなのか、そのことが一つの問題関心であつた。また、オットー・サロモンのような教育者がその教育方法を生み出し、発展させたことで民衆学校の中に基盤を形成し得たこと、その教育方法が多く（約40ヶ国）に影響を与えたのはなぜなのか、それは私が初めてネーススロイド教員養成所の跡地を訪問して以来の問題関心であつた。最近私は140年くらい前にネースで発行され、オットー・サロモンが編集した「スロイド教育新聞（Slojdundervisningsblad）」の史料を名古屋大学教育学部図書室に寄贈した。いつか誰もが閲覧することができるようになればと願っている。

（横山悦生）